



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	炭鉱におけるサークル運動の展開：文学サークルを中心に（後）
Author(s)	水溜，真由美
Citation	国語国文研究，134，44-54
Issue Date	2008-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93361
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_134-44-54.pdf



炭鉱におけるサークル運動の展開

——文学サークルを中心に（後）

水 溜 真 由 美

三 炭労の役割とサークル・ネットワークの形成

（一）炭労のサークル運動振興策

前節で指摘したように、職場サークルの一つの特徴として、労働組合により多面的な支援が行われたことが挙げられる。しかも、サークルに対する支援は、個々の企業・事業所で構成される単位組合によってのみならず、産業別組合によっても行われた。五〇年代においては、総評傘下の主立った産別組合が当該産業部門内における文化活動・サークル運動を支援する構図が広く見られた。石炭産業においても、一九五〇年に発足した炭労は、五〇年代における炭鉱の文化活動・サークル運動の活性化に極めて大きな役割を果たした。以下では、主に『月刊炭労』によりながら、炭労が文化活動・サークル運動を振興するためにどのような工夫を行い、またそのことがいかなる意味を持ち得たのかを検討したい。

A コンクールの開催

炭労は、文化活動を振興する一つの方策として、文芸コンクールを実施した。その先駆けは炭労の北海道地方本部である炭道であったが、一九五四年以降、炭道の方式を踏襲しながら全国レベルにおいても文芸コンクールが行われるようになった。^{*1}作品の選考は、創作・詩・短歌・俳句・川柳・生活綴り方・コント・評論・写真・まんがなどの部門別に専門家によって行われ、『月刊炭労』誌上に入選作と選評が一括して掲載された。

応募数は、第三回を例に見ると、創作（小説・戯曲・シナリオ）三五編、詩八八編、短歌二二九名、俳句一三六名、川柳六七名、小品（コント・随筆）三三編、生活記録八編、評論三編、写真十四点（一〇名）、まんが五点（三名）^{*3}となっている。受賞者には各炭鉱における文学サークルのメンバーが多数含まれている。とりわけ、住友赤平の金野博、三井芦別畑の畑中康雄、三菱上山田の木村日出夫、宇部興産東見初の花田克己を始めとする熱心な運動家たちは、繰り

返し入賞を果たした。多くの場合、山元の文学サークル誌はメンバーの受賞を誌上で報告し祝福した。こうしたことから、コンクールはサークル運動家たちにとって大きな励みになっていたことが推測できる。

選者は『新日本文学』や『人民文学』で活躍していた著名な文学者が多い。その主な顔ぶれは、創作部門は、中野重治、西野辰吉、野間宏、安部公房、詩部門は岡本潤、壺井繁治、中野秀人、短歌部門は木俣修、渡辺順三、俳句部門は加藤揪郎、栗林一石路、川柳部門は九里三作、生活綴り方・生活記録部門は国分一太郎、真鍋呉夫などとなっている。五〇年代の革新運動においては、作家や学者などの知識人が深く運動にコミットし、一般の労働者・市民を啓蒙する構図が広く見られたが、炭労主催の文芸コンクールにおいても、選者を務めた文学者と組合員との間に同様の関係が見て取れる。さらに、選者の一部は、『月刊炭労』や『炭労新聞』の平常号においても、投稿された文学作品の選考を行ったり、文化活動についての啓蒙的な文章を寄稿したりした。

また、炭労は一九五五年の日本うた^{＊4}え祭典への参加に備えて、『炭鉱労働者のうた』の募集を行った。一九五五年一〇月一日付けの『炭労新聞』には入選作三点と佳作二点の歌詞が、選評と共に掲載された。さらに、第一席の『炭鉱労働者のうた』(作詞は田川の中畑梅次)と第二席の『燃えよ硬山』(作詞は三菱上山田の大江将精)については、音楽センターに作曲が委嘱され、一ヶ月後の『炭労新聞』には両作品の楽譜が掲載された。^{＊5}

B 講師の派遣

炭労は、しばしば作家や芸術家を講師として山元に派遣して、日常的な文化活動の振興とサークルの育成を図った。『月刊炭労』より各地の炭鉱に派遣された著名な作家を拾い出してみると、五七年に中野秀人が北海道に、五八年に杉浦明平が筑豊に、西野辰吉が北海道に、五九年に西野辰吉が北海道と常磐に、六〇年に武井照夫が北海道に来訪した。また、五五年八月には、北海道で中野重治、金達寿、西野達吉を講師とする文学懇談会が開催された。野間宏が筑豊に派遣されたこともあった。^{＊7}

右に挙げた作家たちが炭鉱を巡回した際の詳細な記録は残されていないが、講師や参加者の断片的な記録からその様子を推測することはできる。たとえば、杉浦明平による、五八年一月後半から二月にかけての筑豊訪問では、杉浦は二〇日間にわたって、『文化講師としてほとんど毎日炭鉱から炭鉱へ移り歩^{＊8}き、各炭鉱で文学サークルの活動家と酒を酌み交わしながら親しく交流し、文学談義に花を咲かせたようである。^{＊9}

作家とサークル運動家との交流の性格が強かった作家の炭鉱訪問と比べて、より組織的な講座・講習会も開催されている。たとえば、一九五九年の二、三月には、北海道(赤平・夕張・釧路・岩見沢)、九州(筑豊・三池)、宇部、常磐の各地で、合同のうた^{＊10}え講習会が開催され、約四〇〇名が参加している。中央合唱団員が講師を務めた右の講習会では、うた^{＊10}えサークルの中心メンバーに対して、うた^{＊10}え運動史・発声法・歌唱法・指揮法についての講習が、サークル・青年部・炭婦協の一般のメンバーに対しては歌唱指導が行われた。^{＊10}

C文化誌の発行

炭労が炭鉱の文化活動に対して行った貢献のうち、最大のものは『月刊炭労』の発行ではないだろうか。『月刊炭労』は、組合員の文化活動に助言を与え、組合員に文化活動に参加する具体的な機会を提供し、各地の炭鉱における文化活動の動向に関する情報提供を行うなど、多面的な役割を果たした。

第二節で述べたように、学習雑誌・文化誌として『月刊炭労』が新しいスタートを切るのは第五三号（一九五四年六月）である。といつても、第五三号においては未だ石炭産業や労働運動をめぐる硬派な論文が誌面の中心を占め、文化関係の記事は映画評や娯楽面に限定されていた。ところが、第五六号（一九五四年九・一〇月）よりさらなる変化が生じる。第五六号においては、炭鉱の文化や歴史に焦点を当てた「炭鉱民謡物語」や「炭鉱むかしばなし」の連載が開始されたほか、サークル運動を主題とした菅原克己「働く人の詩について——サークル詩の前進のために」が掲載され、表紙にも初めてイラストが用いられた。また、ほぼ同時期に「臨時増刊」として「文芸特集号」が刊行されたことも、特筆すべき動きと言える。こうした傾向は以後加速化し、『月刊炭鉱』のサイズがB五版からA五版に変更される第六三号（一九五五年八月）までに、『月刊炭労』はほぼ完全に文化誌への脱皮を遂げた。

では、『月刊炭労』は炭鉱の文化活動にどのような貢献を行ったのか。

第一に、『月刊炭労』は、組合員の文化活動を活性化し発展させる、啓蒙者としての役割を果たした。その際中心的な役割を担ったのは、

各分野で活躍していた文化人である。先に文芸コンクールについて見たように、彼ら彼女らは組合員の文化活動を専門家の視点より指導した。たとえば、真鍋呉夫と西野辰吉は、「サークル誌めぐり」や「日本の鉱脈（サークル誌月評）」において、各炭鉱で発行されているサークル誌について論評し助言を与えた。さらに、各炭鉱を訪問した文化人が、山元の文化活動について『月刊炭労』誌上で詳しい報告を行うこともあった。たとえば、人形劇団ブークのメンバーであった高山貞章は、「炭鉱の文化活動について」と題した文章を第七九号（一九五六年二月）から第八四号（一九五七年五月）まで五回にわたって連載し、北海道、九州、山口の各炭鉱を文化講師として巡回した経験によりながら、サークル運動の現状について詳しく論じ運動を発展させるための具体的な提言を行った。

第二に、『月刊炭労』は、組合員に文化活動に参加する機会を提供した。『月刊炭労』は、年一度の文芸コンクールの際だけでなく、平時より投稿を募り、随時、創作・詩・短歌・俳句・川柳・コント・まんが・評論など多様なジャンルにわたる読者の作品を掲載した。また、各地の炭鉱で発行されていたサークル誌に掲載された作品が『月刊炭労』に転載されることも少なくなかった。

なお、元炭鉱労働者であった上野英信を炭鉱労働者の間でのスター的な存在に押し上げたのも、炭労の功績である。この点では、旬刊の『炭労新聞』が決定的な役割を果たした。^{*11}というのは、一九五五年一月から五六年前半までの長期にわたり、『炭労新聞』の文化面に、すでに知る人ぞ知るサークル運動家であった上野のえびなしが断続的に連載されたからである。作品名を掲載順に挙げると、「せ

んぷりせんじが笑った」(全五回)、「はじめの発言」(全三回)、「みんなて書いたラクガキ」(全四回)、「親と子の夜」(全五回)、「ひとくわばり」(全一四回)となる。また「ひとくわばり」の連載終了後には誌上で感想文の募集が行われ、五六年七月二〇日の『炭労新聞』にはほぼ一面全体を使って複数の組合員の感想が掲載された。ちなみに、後に炭労教宣部は、「せんぷりせんじが笑った」と「ひとくわばり」の幻灯を制作している。^{*13}

第三に、『月刊炭労』は、各地の炭鉱のサークル運動について情報提供を行うと同時に相互の情報交換を促した。『月刊炭労』にはサークル紹介が頻繁に掲載されたが、横山照雄「中鶴」青空コーラス「生い立ちの記」『月刊炭労』第六四号(一九五五年九月)や、第七六号(一九五六年九月)および第七七号(一九五六年一〇月)の小特集「わたしたちのサークルの歩み」といま問題になっていること」に寄せられた夕張地区学習サークル、飯塚文芸サークル、目尾俳句研究会、山田文学サークル、歯車詩サークル、青空コーラス、清水沢労文工班・白鳩会の報告文など、当事者によるサークル紹介・活動報告も少なくなかった。

また、『月刊炭労』は各地におけるサークル誌の紹介に力を入れた。たとえば、「サークル誌紹介」の欄において、第六三号(一九五五年八月)では『まきやぐら』が、第六五号(一九五五年一〇月)では『高松文学』、『山田文学』、『歯車』が、サークル誌の表紙の写真付きで紹介された。また、先にも触れたが、第七五号(一九五六年八月)からは、真鍋呉夫による「サークル誌めぐり」の連載が開始された。真鍋は、毎回特定のサークル誌を取り上げ、掲載作品について詳し

い論評を加えた。さらに、第九回まで続いた「サークル誌めぐり」は、第八六号(一九五七年七月)より同じ筆者による「日本の鉱脈(サークル誌月評)」に引き継がれた。「日本の鉱脈」は、「サークル誌めぐり」より多くのスペースを用いて、炭労本部に寄贈された近刊のサークル誌を幅広く紹介した。たとえば初回においては、『火山脈』、『歯車』、『まきやぐら』、『詩のつどい』、『ざり山』、『群鴉』、『ひろば』、『萌芽』、『骨像文学』、『裸像』の十誌が取り上げられている。

以上のようなサークルやサークル詩の紹介は、組合員に文化活動に参加するモチベーションを与えると共にサークル活動のノウハウやヒントを提供し、各地におけるサークル活動を相乗効果的に活性化していったように思われる。また、サークル誌やサークル誌に掲載された作品が『月刊炭労』で取り上げられることは、山元のサークルにとって大きな刺激となつたようである。たとえば、『まきやぐら』第一三号(一九五五年八月)の編集後記、『山田文学』第一八号(一九五五年一月)の編集後記では、『月刊炭労』誌上でそれぞれのサークル誌が紹介されたことが詳しく報告されている。^{*15}

また、サークルやサークル誌の紹介は組合員間・サークル間の交流を促す意味もあつた。各炭鉱に離散しているサークル運動家は、『月刊炭労』を通じて各地の炭鉱・サークルの状況やサークル運動家についての情報を入手したことが推測される。その延長線上で、サークル誌の交換や手紙のやりとり、サークル運動家同士の直接的な交流、合同での文化活動、地域におけるサークル協議会の結成など、さまざまな回路による交流が開始された。この点については次項で詳しく検討するが、しばしば『月刊炭労』がサークル間の交流の契

機となったことを改めて強調しておきたい。たとえば、次項で述べる北海道文学サークル協議会が結成された契機について、『月刊炭労』の文芸コンクールで何度か入賞した経験を持つ住友赤平の金野博は、「あれも月刊炭労が大きかった、毎月北海道の書き手がでいるんだから、紙上討論などもやったから急速に気運が出てきたのではないか」と回想している。^{*18}

さらに、『月刊炭労』誌上で、組合員が互いの作品を批評しあうこともあった。炭労が主導する文化運動には、専門家・文化人が労働者を啓蒙・指導する構図が強固に存在していたが、このことは組合員が互いの作品を自らの判断で批評することを妨げなかった。^{*19}たとえば、『月刊炭労』第九三号（一九五八年三月）では、一九五七年度文芸コンクールの入選作をめぐる「読者の創作合評会」の特集が組まれているし、第九四号（一九五八年四月）および第九五号（一九五八年五月）では、三井芦別文学サークルによる「新年文芸特集号合評会」が掲載されている。また、第九六号（一九五八年六月）には、三井芦別文学サークルの合評会を批判する畑中康雄の論考が、第九七号（一九五八年七月）には、同じく三井芦別文学サークルの合評会に対する批判を含む木村日出夫の「月刊炭労」五月号批判」が掲載されている。畑中と木村の文章は、『月刊炭労』誌上で組合員同士が意見交換や討論を行っていたことを示す例でもある。誌上では、しばしばサークル運動家によるサークル論も展開された。

なお、組合員が相互の作品に批判を向け合う姿勢は、サークル運動そのものに内在していたように思われる。山元の文学サークル誌にも、同じサークルの仲間の作品や、他誌に掲載された作品に対す

る批評文がしばしば掲載されている。^{*20} また、次項で見ると、他の文学サークルのメンバーから寄せられたサークル誌についての感想や意見が通信欄に掲載されることもあった。

（二）サークルネットワークの形成

前項で述べたように、炭鉱のサークルは、『月刊炭労』、『炭労新聞』を他のサークルの動向を知るための一種の掲示板として用いながら、徐々に横の結びつきを強めていった。こうしたサークル間の関係は、職場における文化活動を活性化すると共に、炭鉱労働者としての横の結びつきを補強する意味も持った。以下では、主にサークル誌によりながら、サークル間の交流に該当する具体的な動きを見てみたい。

A サークル誌の交換

まず、もともと一般的に行われていた交流の方法として、サークル誌の交換が挙げられる。『月刊炭労』誌上でもたびたびサークル誌の交換が呼びかけられている。たとえば第八四号（五七年五月）の巻末には、「お互いにサークル誌を交換しよう」という見出しの下にサークル誌のリストが掲載されている。

なお、雑誌の交換を介した交流は、炭鉱のみならず五〇年代のサークル運動において広く見られた動きである。当時のサークル誌には受贈誌のリストを掲載する慣行があったため、その状況を把握することは比較的容易である。以下では、一九五七年から五八年にかけて発行された炭鉱の文学サークル誌を三点取り上げて、受贈誌のリ

ストを示してみたい。なお、炭鉱のサークルについては括弧内に炭鉱名を記すと同時に、識別のために▲を付記した。

○大正中鶴文学サークル『裸像』第一〇号（一九五七年二月）記載の受贈誌

『北斗』第一号、『砂川短歌』（三井砂川▲）第三〇号、『砂労文学』（三井砂川▲）第二号、『断層』（雄別▲）第七号、『火山脈』（雄別▲）第三八号、『月刊たかまつ』（日炭高松▲）第三・四号、『まきやぐら』（▲）第二五号、『山田文学』（▲）第二七号、『歯車』（北炭幌内▲）第三二号、『ひろば』（古河雨竜▲）第九号、『新幌内共同デスク』（北炭新幌内炭鉱？）新年号、『芙蓉』第一九号、『北九州文学』第四号、『高島文学』第二号（高島▲）、『炭炎』第一四号（▲）、『炭鉱の生活史』（三菱美唄▲）

○三菱美唄炭鉱文学会『炭炎』第一五号（一九五七年七月）記載の受贈誌

『まきやぐら』第二七号（▲）、『群鴉』第二号（▲）、『あゆみ』（出張主婦会生活綴り方グループ・あゆみ会▲）第六号、『火山脈』（▲）第三九号、『裸像』（▲）第一一号、『萌芽』（三井美唄▲）号数不明

○夕炭労文学サークル『群鴉』第八号（一九五八年一月）記載の受贈誌

『火山脈』（▲）第四六・四七号、『ひろば』（▲）第一三・一四号、『幌内文学』（北炭幌内▲）第二・三号、『響土』（太平洋▲）第一五

号、『炭鉱の生活史』（三菱美唄▲）第六号、『国鉄文化』（国鉄労組）第一〇月号、『泉』（札幌印刷）第五号

右のリストを参照すると、炭鉱のサークル同士の間でかなり活発に雑誌の交換が行われていたことがわかる。ちなみに、他のサークル誌を認知するきっかけとしては、『月刊炭労』が大きな役割を果たしたことが推測できる。

さらに、サークルは雑誌の交換を行うだけではなく、しばしば、他誌に掲載された作品を転載したり、他のサークルのメンバーからの手紙を通信欄に掲載したりすることもあった。例を挙げよう。

サークル誌が、他誌に掲載された作品を転載している例としては、『山田文学』第二六号（一九五六年九月？）が挙げられる。「各地サークル誌の作品」という特集を組んだ第二六号では、『まきやぐら』第二二号（一九五六年五月）掲載の花田克己「坑」、『裸像』第五号（一九五六年六月）掲載の山野てつお「ショウチュウ」を含む四編が転載されている。また、『歯車』第三二号（一九五七年一月）においても、『炭坑サークル誌』の特集において、『山田文学』第二〇号（一九五六年一月？）掲載の椎葉実生「キャップランプ」、『裸像』第八号（一九五六年一月）掲載の小日向哲也「硬山を見ろ」、『火山脈』第三八号（一九五六年二月）掲載のかさいまさる「俺達の職場」など八編が転載されている。

通信欄に他の炭鉱のサークルメンバーから寄せられた手紙が掲載されている事例は枚挙に暇がない。たとえば、日炭高松文芸学習会発行の『炭鉱長屋』第三号（一九五六年三月）の「読者通信」欄に

は六通の手紙が掲載されているが、うち三通は炭鉱労働者から寄せられたものである。北炭新幌内炭鉱の秋好昌夫の手紙には、サークル誌の献本に対する謝辞が述べられている。また、三井山野三坑の山本行進の手紙には、同じくサークル誌の献本に対する謝辞と『炭鉱長屋』第一号の感想が記されている。雄別炭鉱の石田政治の手紙は、上野英信に対する火山脈文学会のカンパを送る際に同封されたものである。^{*21}

また、『まきやぐら』第一八号（一九五五年十二月）には、『火山脈』の岩崎栄則と『炭炎』の中西茂の手紙が掲載されている。これら二通の手紙は、『まきやぐら』第一六号についての詳しい感想を述べたものであるが、いずれも厳しい批判を含んでいる点が興味深い。また、『まきやぐら』には花田克己と親交のあった上野英信からの通信もたびたび掲載されている。たとえば、第二三号（一九五六年七月）にはカンパ^{*22}に対する上野の礼状が掲載されている。

B サークル協議会の結成

五〇年代末頃になると、以上のような交流の積み重ねを背景として、分野別のサークル協議会を結成する動きが生じてきた。その一つは、五八年九月に結成された道炭労文学サークル協議会（以下、道炭労文サ協と略）である。結成までの経緯を見てみよう。^{*23}

道炭労文サ協の結成は、一九五七年末から五八年初頭にかけて、サークル運動家たちがサークル協議会結成を構想して互いに手紙をとり交わしたことを端緒とする。その後、五八年五月一八日に北炭空知労組と北炭空知文学会の呼びかけにより、空知を中心とする炭

鉱の文学サークルが会合を持った。この会合への出席は四支部に留まったが、翌六月二八から三〇日にかけて、三井美唄労組と三井美唄文学サークルの呼びかけにより第二回の交流会が開催された折には、参加支部・参加者ははるかに増えて一支部、三一名となった。第二回の交流会が成功した結果、九月二十八日には、早くも道炭労文学サークル協議会が結成される運びとなった。また第二回交流会での話し合いの結果、道炭労文サ協は『炭道文学』の編集を担うことになった。^{*24}

当時の『月刊炭労』に掲載された三井美唄支部萌芽同人会「文化創造の担い手は俺たちだ——第二回道炭労文学サークル交流会報告」^{*25}によれば、第二回の交流会では、自己紹介の後、各サークルの現状報告が行われた。『月刊炭労』掲載の文章には、交流会での報告に基づいて作成された『炭炎』、『群鴉』、『あゆみ』、『層人帯』、『砂労文学』、『芦労文学』、『もぐらのなかま』、『ひろば』、『ずり山』、『みさき』、『火山脈』、『断層』、『砂丘』、『響土』、『幌内文学』、『萌芽』の活動概要の一覧表が添付されている。

同じ頃、九州でも文学サークル間の広汎な交流が進められていた。九州探炭の文学サークル誌『あしおと』第一号（一九五七年十一月）に掲載された草笛健作「第一回筑豊文学サークル懇話会に出席して」によると、五七年一〇月二〇日、上山田の労働会館において、筑豊の文学サークル（上山田、山野、二瀬、九州探炭、日炭高松、大正、田川、木城）のメンバーが上野英信を交えて集った。この会合が、どのような目的で誰の呼びかけによって開催されたものかは明確ではない。ただし、同じ頃発行された『山田文学』第二七号「あとが

き」において、筑豊地区における文学サークル協議会の設立計画が取り上げられていること、また草笛も一二月に開催される第二回の懇話会において「筑豊文学サークル懇話会結成」を議題とすると述べていることから、懇話会の開催が文学サークル協議会の設立を一つの目的としていたことはほぼ間違いないと思われる。

他方で、『あしおと』第三号（一九五八年四月）には、草笛健作「第二回文学サークル代表者会議報告（作家杉浦明平氏を迎えて）」が掲載されている。一月二四日に杉浦明平を迎えて開催されたこの会議は、博多の九炭労働本部会議室が会場であること、『月刊炭労』による山元への講師派遣と抱き合わせであることからわかるように、先の筑豊懇話会とは区別される、炭労の仲介する集まりであったことが推測できる。参加サークルも、古河目尾、山野、杵島、大正、高松、上山田、三池、九探、岩屋、大辻、新入と、筑豊懇話会より多数となっている。といっても、二つの会合は、サークル協議会結成への期待が強まる中、部分的に重複する参加者により開催された点で、無関係なものとは言えない。

右に見た北海道と九州におけるサークルネットワークは、どのような機能を果たしたのだろうか。道炭労文サ協について筆者が知り得た活動は、現在のところ、年刊の『炭道文学』の編集と、交流会の開催に留まる。^{*26}なお、第一号（一九六三年一月）以降『炭道文学』のページ数が著しく減っていることから、この頃よりサークル運動そのものが著しく衰退し始めたことが推測できる。前掲「炭鉱労働者の闘いと文学」において、畑中康雄は、文サ協結成後、「九州の仲間とも手をつなぐ『炭労文学サークル協議会』の結成」の夢を

実現するどころか、「運動は数年をまたずして下降線を描いてしまった」と述べている。^{*27}

他方で九州については、谷川雁の登場によって、文学サークル協議会設立の企画は九州サークル研究会の設立および『サークル村』の創刊に嚮導されていたことが推測できる。『裸像』第一六号（一九五八年四月）の「編集後記」には、「また一三日（一九五八年四月一三日——筆者注）は詩人谷川雁、森崎和枝両史を当地に迎えて、山田、高松、古河、木城、大正など各サークルが参加し、座談会をもって、文学サークルの本質と創造上の問題を鋭くついたよい研究会であった」という記述が見られる。第一回筑豊文学サークル懇話会の司会であった上野英信が『サークル村』の編集委員に名前を連ねたことも、筑豊における炭鉱のサークルネットワークが母体となつて『サークル村』が創刊されたことを裏づける。

四 結びにかえて

最後に、第一節で述べた筆者の問題関心に照らして、炭鉱のサークル運動をめぐる本稿の考察がどのような意義を持つのかを総括し、また今後の研究課題にも触れた上で、本稿を締めくくりたい。

一点目は、『サークル村』研究との関わりである。第一節で述べたように炭鉱のサークル運動は『サークル村』の運動の重要なバックグラウンドであったが、これまで本格的な研究は行われてこなかった。本稿は炭鉱のサークル運動について基礎的な事実を提示した上で、炭労の役割とサークルネットワークの形成について掘り下げた

考察を行った。これらの点は、『サークル村』との関わりにおいても極めて重要である。というのは、九州六県および山口県のサークルの連合組織であった九州サークル研究会は、炭鉱のサークル運動の蓄積の上に、サークル間のネットワークを（部分的に）包摂する形で成立したからである。しかもこのことは、サークル運動がさかんであった日炭高松など中間市周辺のサークルに限定されない。たとえば、炭鉱の文学運動における『まきやぐら』の影響力と、花田克己と上野英信の交流がなければ「九州サークル研究会」に山口県が含まれることはなかったであろう。また本稿では、『月刊炭労』が炭鉱のサークルネットワークの形成に関して大きな役割を果たしたことを強調した。『月刊炭労』は、各地のサークルやサークル誌を熱心に紹介し、またサークル運動家を頻繁に誌面に登場させることによって、サークル間の交流を促進した。そうした点において『月刊炭労』は、「サークル交流誌」を自称した『サークル村』の一つのモデルとなったことが推測できる。

二点目は、職場サークルのケーススタディとしての意義である。この点について、本稿ではまず、文学サークルに力点を置きながら炭鉱における職場サークルの活動状況を概観した。その上で、第一に、炭鉱労働者の産別組合であった炭労が『月刊炭労』の発行を中心としてサークル運動を積極的に振興したことを明らかにした。第二に、同じ炭鉱部門に属するサークル同士の間で、横断的なネットワークを形成する動きが生じていたことを明らかにした。こうした動きは、企業の枠に基づく労働者間の分断を相対化する大きな可能性をはらんでいたものと評価することができる。なお、産業別組合

の役割やサークル間の交流については、今後、他の産業部門における職場サークルの運動についても検証されるならば、より有意義であろう。

最後に、本稿では炭鉱の文学サークルの運動に力点をおいて議論を展開したが、ページ数の関係から、各々のサークルの活動やサークル誌に掲載された作品について詳しい分析を行うことができなかった。この点については、近く稿を改めて論じる予定である。

＊本稿を執筆する上で、多くの方に聞き取り調査にご協力いただきました。この場をかりてお礼を申し上げます。また、資料の提供、インフォマントの紹介など、様々な面で多大なご支援を賜った村田久さん、坂口博さん、青木隆夫さん、松岡英一さんにも、深くお礼を申し上げます。

＊1 一九五一年以降毎年一月に発行された『炭道文学』は、文学コンクールの入選作の作品集として編集された。

＊2 コンクールは第五回まで行われた。結果発表が行われた『月刊炭労』の号数を示すと、第一回は臨時増刊号（一九五四年一月）、第二回は第六八号（一九五六年一月）、第三回は第八〇号（一九五七年一月）、第四回は第九一号（一九五八年一月）、第五回は第一〇七号（一九五九年五月）である。

＊3 「あとがき」『月刊炭労』第八〇号、一九五七年一月。

＊4 選考団体は新日本文学会詩委員会、代表は関根弘である。

＊5 「炭鉱労働者のうた」作曲もできあがる。『炭労新聞』一九五

五年二月一日。作曲者は「炭鉱労働者のうた」が岡田和夫、
「燃えよボタ山」がいづみ・たくである。

*6 『火山脈』第三二号、一九五五年九月。

*7 上田博氏への聞き取りより（二〇〇六年九月二六日）。

*8 杉浦明平「炭鉱廻りから帰って」『月刊炭労』第九四号、一九五八年四月、三六頁。

*9 杉浦の論考のほか、『月刊炭労』の同じ号に掲載された木村日出夫「文化講師杉浦明平氏をかこんで」、森田ヤエ子「炭鉱文化講師として来山したルポルタージュ作家杉浦明平氏にあつても参照」。

*10 藤本洋「炭鉱におけるうたごえ運動の問題点——うたごえ講習会の討論から」『月刊炭労』第一〇八号、一九五九年六月。

*11 『月刊炭労』にも、「百一日めの太陽」（第八七号、一九五七年八月）、「基地のなかの炭労」（第九五号、一九五八年五月）、「裂」（第九九号、一九五八年九月）など、上野のルポルタージュが多数掲載されている。

*12 左翼系の作家たちの間でも、上野英信の名前は知られていた。たとえば、上野が日炭高松を解雇された際には、真鍋呉夫を坑内に案内したことがその理由とされたこともあり、『人民文学』に「日炭高松の労働者上野鋭之進君にたいする会社側の暴挙について訴える——文化活動の民主的自由を守るために」という文章が掲載されている（第四卷一〇号、一九五三年一〇月）。

*13 「せんぶりせんじが笑った」は、二〇〇六年にボレポレタイムス社よりDVD化された。

*14 第一〇二号（一九五九年一月）より、西野辰吉が執筆を担当した。

*15 「まきやぐら」では、中央の文学雑誌である『現代詩』や『新日本文学』に自誌が取り上げられた際にも誌上で報告を行っている。

*16 第八九号（一九五七年一〇・十一月より設けられた「おらがの炭鉱」の欄では炭鉱紹介が行われた）。

*17 第六七号（一九五五年十二月）、第七七号（一九五六年一〇月）、第八四号（一九五七年五月）の巻末には、「お互いにサークル誌を交換しよう」という見出しと共にサークル誌のリストが掲載されている。

*18 「労働者文学への期待——炭道文学一〇号記念座談会」『炭道文学』第一〇号、一九六二年五月、一二九頁。

*19 文芸コンクールにおいて専門家に作品の選考を委ねることにについては、批判的な意見を持つ運動家も存在した。こうした批判から、道炭労では、一九五七年度を最後に文芸コンクール方式を廃止した。畑中康雄「炭鉱労働者の斗いと文学」『年刊労働者』第六号、一九七五年。

*20 一例を挙げると、『火山脈』第四五号（五八年六月）に猪狩繁寿は「石田政治小論——近作々からず」をめぐって」を寄稿し、第四三号（五七年十二月）に掲載された石田の作品を批判的な視点から論評している。

*21 被爆による上野英信の体調不良を知らせ、カンパを募った『炭鉱長屋』第二号（一九五六年二月）の呼びかけに応えたもので

ある。

* 22 注五五と同じ理由によるものと思われる。

* 23 以下は、畑中康雄「文サ協一年のあゆみ」『炭道文学』第八号、一九五九年六月、畑中康雄「炭鉱労働者の斗いと文学」『年刊労働者』第六号、一九七五年三月を参照した。

* 24 先に触れた文芸コンクールの廃止は道炭労文サ協によつて決定された。前掲畑中「文サ協一年のあゆみ」。

* 25 第九八号、一九五八年八月。

* 26 たとえば、道炭労文学サークル協議会と道炭労うたごえサークル協議会が共同で発行したガリ版刷りの機関誌『炭道文化』に、三笠での交流会の報告が掲載されている（第一号、一九六一年九月）。

* 27 一五三頁。

（みずたまり まゆみ・北海道大学大学院文学研究科准教授）